



ジュヴェナイル・ジャーニー

Juvenile Journey

おねショタ♥えっち旅

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

工房寺
ふれぜんつ

E. NOT





目次

序章

第一章 欲情の始まり

1
7 7



序章
プロローグ
Prologue

空が燃えていた。

否、街の炎が空を焼くように染め上げていた。

誕生日を迎えたばかりの十代前半の少年フィロスは、

それを離れた場所からただただ眺めるしかなかった。

風に混じって、あらゆるものの燃える匂いが鼻腔を刺

激する。

焼け落ちていく。何もかも。

焼け落ちていく。絆も思い出も。

大火の原因はおよそ察しがついた。隣で自分を抱きしめる二十代の女性、ソフィアの狼狽した様子から。

そして今まで聞いてきた噂から。

曰く、この街の書庫に保存されている旧時代の人類の知識を「メカニカ」を自称する機械化人たちが狙っている。

彼らは核汚染による文明崩壊後、フィロスたちセリアンのように環境に適応できなかった人類だ。

核汚染された環境に適応した新人類「セリアン」は当初ニュークリアンと呼ばれ、人類の異物として忌み嫌われ迫害されてきた。それは前時代が崩壊して一世紀以上

経つというのに無くなる気配はない。それどころか、セリアンが数を増やし力をつけるにつけ、種族間の争いは激化した。

ゆえに。

ロストテクノロジーはなんでも——それこそ兵器転用できないようなものであっても——独占し、他者より優位を得、維持するという愚かな競争が行われている。

時には、今日このような野蛮な方法で。

フィロスにとって最悪だったのは、彼の両親がその書庫の管理をしていて、巻き込まれた可能性が非常に高いということだった。

「どうしよう、ソフィ……」

「フィロ……」

ソフィアは年長者として、今はただ抱きしめるしかなかった。もし街に駆け出していけば危険だった。だからそういった行動をさせないために、落ち着かせる必要を感じていた。

二人はほんの少し前まで、街の中心から少し離れた場所にある丘まで、星を見に行っていたのだ。天体観測は

フィロスの好みだったし、探検家^{エクスプローラー}として各地を歩き回ってきたソフィアにとつても星は現在地を示す貴重な道標でとても身近なものだった。

そういつた星に関する知識の勉強にと二人で連れ立って街を離れていたことが、この際は幸いだったと言えよう。

とはいえである。

この様子では自分たちの財産は消失しているか焼けていなくてもメカニカに略奪されているだろう。今は火の手と、まだ近くにいるかもしれない略奪者たちを警戒しなくてはならない。もし荒くれ者たちに捕まれば、奴隸として売られるか慰み者になる可能性もあるし、問答無用で殺されることだつて考えられる。

「しかたない、フィロ。一旦ここを離れよう。少し歩けど、あたしの隠れ家があるから」

ソフィアはフィロスの手を握って、引きずるようにその場を後にした。住み慣れた街は、遠からず地図から消えるのだろうかため息を漏らしながら。

♫ ♫ ♫

「ソフィア……」

フィロスは思わず名を呼んだ。

案内された森の隠れ家はあまりにも散らかっており、埃をに塗れていた。

「あはは、しばらくここ来てなかったから……」

言いつつ乱雑に押された書物を片付けていく。

「手伝うよ」

「あー、うん。よろしく」

バツの悪そうな返事を背中に受ける。床に散らばっているのはほとんどが書物だ。ゴミやガラクタの類ではないが、その多くが旧時代の遺跡に関わるものだった。

「これ、ソフィアの探検に関係あるやつ？」

「そうだよ。そこに書かれているものを集めては、実際に見に行つてた。見に行つてどうするわけでもないんだけど、実際にそれが存在^あするのを見た時、今この世界と読み聞きして知っている旧時代の世界が地続きなんだつて思えてね」

「ふーん」

「あれ、興味なかった？ フィロ、そういうの好きかと思っただけだ」

と、想定外の反応に多少狼狽えて振り向くと、少年は埃で汚れたコバルトブルーの布に釘付けになっているところだった。

「うわっ、ごごごごごごめん、ソファイ！」

ソファイ以上の狼狽ぶりに、思わず笑って応える。

「いやいや、……まあ、洗濯して片付けておかなかつたあたしが悪いし？ それはそれとして。あんまり広げると伸びちゃうから返してくれると嬉しいな、あたしのTバック」

真つ赤になりながら、突き出すように下着を差し出すフィロス。それを受け取り、ソファイは「洗濯し直したな、こりゃ」と呟くのだった。

一通り片付けが終わり、洗濯を始める。旧時代と異なる大規模な電力網は整備されていない。しかしそれに代わる新しいエネルギー資源「ラジカイト」の存在があつ

た。放射性物質であるそれは高エネルギーの塊であり、それを加工しているんなものが作られた。

現在ソファイが利用しているこの自動洗濯機もその一つだ。いくら前時代の文明が崩壊したといつても、利便性を追求してきた人類が科学技術をそう易々と手放したりはしないのである。

初めは放射能汚染環境に適応するための医療技術、次に食料確保。そして、生活の利便性を高める家具にとそれらは応用されてきた。

しかし、未だ原始的な生活を余儀なくされている部分も少なくない。人々は宇宙はおろか、空を取り戻すこともできていない。さらには交通手段が非常に限られているという現状。

一つの都市国家内で、採掘されるラジカイトの量にもよるが、公共交通機関が整備されているにはいる。しかし都市と都市をつなぐ交通機関はない。技術的、資源的問題もさることながら、何よりも都市間の移動を厄介にしていたのは放射線による影響とはまた別の、とても危険な環境によるところが大きい。

地球は現在、至る所で重力場が乱れ、局所的に重力異常を起こしている。

実際にどういう現象があるかという、洗濯が終わるのを待つ二人がいま崖に突き出すように作られたペランダから眺めている景色——地上の一部の地殻が崩れ、岩石が空に浮いている、というものだ。

ここでは重力がほぼゼロになり、全てが浮く。地殻があつたところには巨大な穴があつて地球の核へと通じていると言われているが、正確なところは定かではなかつた。あるはずの溶岩も見えないし、それらが吹き出しているようにも見えない。

地殻に突如現れた虚空、としか言いようがなかつた。そして働かない重力は、もう一つの危険な状況を生じさせている。それは酸素がその場に止まれない、ということだつた。全くの真空というわけでもないのだが、高山のデスゾーンと等しい程度くらいしかないと推測されている。

重力異常地帯はその特性上負圧となり、周囲から空気が流れ込み風を生む。そして重力ゼロの区間に入ると地

球から離れていくように上昇し、自転に取り残されて重力ゼロの区間から離れると再び地球の重力に引かれ、ダウンバーストとなつて降り注ぐ。これに巻き込まれるとメカニカであろうとセラアンであろうと人は死ぬ。

空を飛ぶ鳥さえそれを避けるのだ。

いまのところ、重力異常が起こる原因は不明だつた。

原因がわからない以上、現在ある場所でのみ発生していて今後は新たに起こることはない、とは言えず、それゆえに都市間を繋ぐ公共交通機関を敷くことはできなかった。

一つの大きな国家という一大勢力圏が消滅し、各都市は都市国家として独立していたことが、都市間をつなぐ交通網整備事業の障害に拍車をかけた。

たくさん旅をしてきたソフィアは、都市国家同士が手を取り合うことが稀有な例であることを知っている。各都市の元老院は、自分たちがその都市にいる限り「絶対的な権力者」でいられることを理解していた。

洗濯機から電子音がなり、その仕事の終了を告げる。

「終わったから干してくるね。それともフィロ、やつて

くれる？」

洗濯物の多くはソフィアの下着だったことをフィロスは知っている。悪戯っぽい笑みを浮かべたソフィアに、フィロスは真つ赤になつて拒否した。

「あははは、可愛いやつ」

洗濯物を干し始めたソフィアの鼻歌を遠くに聴きながら、明るみ始めた空を眺める。想いを馳せるのは両親のことだ。

自分はもう一人ぼっちになつてしまった。これからどうやって生きていけばいいのか。

住むところは？ 食べるものは？

いや、まだ二人の亡骸を見たわけじゃない。まだ生きていくかもしれない。

そんなことを考え悩んでいるうち、フィロスはいつしか眠りに落ちていた。

✽ ✽ ✽

「起きた？」

いつの間にかベッドの中で寝ていたフィロス。ソフィアが自分を抱き上げてベッドに連れて寝かせてくれたことは想像に難くない。

「ごめん、ソフィ。先に寝ちゃつて。重かつたでしょ」

「はつは。フィールドワークしてお姉さんをナメちゃいけない」

得意げに腕を上げ、カコブを見せる。その遅しくも美しい腕より、ノースリーブの隙間からこぼれ落ちそうなほど豊かで柔らかな胸の膨らみに目を奪われかけ、慌てて顔を背けた。

「朝ごはん作つてあるから、顔を洗つておいで」

鼻腔をくすぐる香ばしい匂い。

今後の悩みはひとまずおいて、腹を満たさなければいい考えは浮かんでこないものだ。

そう思つてベッドから出ようとしたところで少年は硬直する。

「ん？ なに、さつさとベッドから出てきなよ」

「いや、あの……」

布団をめくらずともわかる。今はベッドから出られない

い。

「もう太陽は真上なんだよ？ いつまでも——」

「あ、まって！」

抵抗も虚しく無理やり布団を剥がされた。少年の意思とは無関係に存在感をこれでもかと示さんとする股間の膨らみ。恥ずかしくてフィロスは手で隠した。

「あ、あー。そうか。うん。ごめん」

苦笑して謝るソフィアに

「ソフィのばかっ」

と罵る。

「やー、ほんとごめんて。あたしにはないからさ、気づかなかつたよ。なんなら顔洗うついでに、トイレでヌイてきなよ。待ってるから」

「ばかー……」

叫んでフィロスはトイレに駆け込むのだった。

食事中、しばらくむすつとしていたフィロスだったが今後のことが話題に登ると食事の手を止め、少し思案した後ソフィアに告げた。

「ぼく、一度街に戻るよ。母さんと父さんが生きているかもしれないし。そうじゃなかったとしても、確認しないとやっぱり何も決められない」

真剣な眼差し。

「そうだね。一晩明けた今日なら奴らもいないだろうし状況を確認するのは大事だ。あたしも一緒に行くよ」

「でも、もしまだ奴らが残ってたら」

「大丈夫。もし占領するつもりなら焼き討ちなんてしないし、瓦礫の山なら身も隠しやすいはず。警戒の目も一人より二人の方がより安全、でしょ？」

ソフィアの言うことは至極もつともなことだった。両親や実家の捜索中に背後から捕まったりしたら意味がない。

「わかった。でも、ソフィも気をつけて。ソフィは、その……」

「？」

もじもじと言い淀む。

「ソフィは綺麗だから、変なやつに捕まったりしたら、何をされるか」

その反応に思わずソフィアは顔を綻ばせた。

「そうかあ、フィロはあたしを心配してくれるんだね、嬉しいなあ」

「と、とうぜんだろう」

「ねえフィロ、もっかいいつて？」

「え、なにを……」

「あたしが、なんだつて？」

椰^{から}揄^かうとか、そういうのとはまた違った表情で悪戯っぽく微笑むソフィア。フィロはその表情に、理由も分からず胸が高鳴るが嫌ではなかった。だから非常に恥ずかしく照れくさいのを我慢し応じる。

「き、ききき、綺麗、だから……」

「あーん、もー、フィロは良いやつ！」

「ソフィ、くるし、くるしいよっ」

テーブルを乗り越え頭を抱きしめられた。



午後、目立たない服装とバックバック姿で、密かに街

に戻った二人。焼け出されながらも生き延びた人々が数名、焼け跡を歩いているのが見えたことから、案じていた襲撃者たちの略奪という事態はなさそうだった。

両親が勤めていた書庫は焼け落ちてはいなかったものの、無惨に殺された住民たちの遺体が凄惨さを物語る。

書庫の中はほぼ空で、多くの書物は持ち去られたようだった。フィロスが愛した本の数々も持つていかれただろう。そして何よりも残念なことに、フィロスは最愛の両親の遺体と対面することになる。

「気分は落ち着いた？」

半壊したアパート。それがフィロスとソフィアの住んでいた家だった。財産となるようなものは残っていないが、いくつかの食器は残っていた。それで湯を沸かし、茶を淹れる。

マグカップを受け取ったフィロスは、無言のまま口をつけた。熱いそれは体を内部から温めてくれるが、喪失感はやはり埋まらない。

寝る前に頭の中に渦巻いていた今後への不安が、落ち

着いた今もおもたげた頭を下げることはなかった。

「ありがとう、ソフィア。……ぼくはこれから、どうすればいいのかわからないよ。どうやって、生きていけばいいのか……」

膝を抱える少年のそばに座り、肩を抱き寄せて頭を撫でる。

「あたしがついてる。フィロは一人じゃないよ？ 生きていくのは大変だけど、なんとかなるのも人生だから」

「でも、ソフィアは探検家だろ。ぼくがいることでソフィアの邪魔をしたくない」

ソフィアはいつかまた探検に出発する——フィロスはそれを知っていた。だから自分があることでそれをやめさせるなんて嫌だった。

「ソフィアの重荷になりたくない」

膝に頭を埋めてフィロスは涙を流した。ソフィアはその頭を撫でる手を止めずに話を続ける。

「ねえフィロ。昔あたしが話してあげた塔のこと、覚えてる？」

「天まで届く塔のこと？ 覚えてる」

フィロスが数年前にソフィアに聞かされた旧時代の遺跡の話だ。

昔人類は、地上から遙か高い空の向こうまで届く塔を作った。どこまでも高く伸び、聳えるそれに想いを馳せたフィロスは、いつしか直接見てみたいという想いを持つようになった。

憧れといつてもいい。常々、自分もいつか見に行きたいと口にするようになっていたのだ。

なんのために作られた建造物なのか。それがわかってもわからなくても、遙か広大で不思議な宇宙に繋がるものなのだとしたら、これ以上彼の心を揺さぶるものはない。

「忘れるわけない」

それは同時に、ソフィアと共にその塔まで行きたいという想いでもあったのだから。

「じゃあ、いこっか？ 二人で」

「え、でも……」

今の自分では足手まといになる——そんなことを言うとしたが、唇に当てられた人差し指で遮られた。

「旅に早いも遅いもないよ？」

耳元で囁かれる。それは今まで聞いたこともないような甘い声だった。ゾクつとするような感覚が心を乱し、鼓動が速くなる。

「そ、ソファイ……」

「一緒に行く？」

ソファイとずっと一緒にいられる、その期待と憧れと興奮でフィロスはいつの間にか悲しみと喪失感を忘れていたが、そのことに気づくことはなかった。

静かに頷き、意思を示す。

「わかった、じゃ準備しよ」

言い終わるや否や耳を甘囁みされ、フィロスは

「ひゃっ」

と声を上げた。

「あはは、変な声出して可愛いやつ。行くよ、少年！」
頭を優しくも乱暴に掻きまわしてから、ソファイは立ち上がる。

こうして、二人の「塔」を目指す旅が始まった。



第一章
欲情の始まり
The Beginning of Lust

「ソフィはさ、その『塔』まで行ったことはあるの？」

荒れた舗装路を歩く二人。街を離れば、すれ違う相手はほとんどいかなかった。旧時代と違い、車両の往来も滅多にない。

二人が向かう先はセリアンの街の一つ。出発地点からは比較的近く、隠れ家で備蓄保存していた食料で辿り着ける位置にあった。そこであらためて装備を整え、目的地へと向かう。その道中での会話である。

「塔にはまだ行ったことないよ。かなり遠くから見ただとはあるけどね」

「今まで何度も探検に出たのに、なんで行かなかったのさ」

「んー、どこかの誰かさんが一緒に行ったそうにしてたからねえ」

椰揄うように笑うソフィア。

照れ隠しに少しムツとした表情をするも、自分のために取っておいてくれたことがフィロスは嬉しかった。

「締まりのない顔しちやつて。嬉しいなら嬉しいとはつきり言う」

「う、うええ」

「嬉しい？」

覗き込むように尋ねる。そのコバルトブルーの瞳はどこまでも澄んでいて、フィロスは赤くなりつつ

「……嬉しい」

とつぶやく。

「素直な子は好きだよ」

首に腕を回してフィロスの頭を抱き寄せる。当然、大きな胸が少年の顔を圧迫した。

——わ、わかつてるのかな、ソフィは……。

戯れ合う中でフィロスは、胸の柔らかさとソフィアの匂いで意識が飛びそうになっていた。

☾ ☾ ☾

夜。

見晴らしのいい高台に野営^{キャンプ}を設置すると、食事を済ませ寝袋^{シュラフ}へと潜り込んだ。この寝袋は大人用で、ソフィアが以前使っていたものだった。ソフィアは隣で同じよう

に寝袋に入り、静かに寝息を立てている。

虫や野生動物の鳴き声に混じり、ソフィアの息遣いを感ずる。

フィロスは昼間のことを思い出していた。予期せずにソフィアの胸に――顔がではあるが――触れたこと。そのやわらかさと大きさ、そして汗に混じるソフィアの匂い。

そしてなにより

「前にあたしが使ってたシユラフ貸してあげるよ。大丈夫、ちゃんと洗ってあるから」

と笑いながら言ったソフィアの言葉。

洗ってあると言われたものの、寝袋の中で深呼吸すれば、胸いつばいにソフィアの匂いが広がる気さえしてくる。

フィロスのペニス、あの日の寝起きとは異なり、明らかに性的興奮によって痛いほど勃起していた。

呼吸をする度、ソフィアの匂い――と思い込んでいる洗剤の匂い――がフィロスの脳を刺激して下腹部への血流を増やしていく。

フィロスは頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

埃に塗れていたとはいえ、ソフィアの下着を手にしてしまったこともフラッシュバックする。

小さい三角の布地。

ソフィアの瞳の色と同じコバルトブルー。

柔らかで手触りの良い布と、透けたレースに咲く花の意匠。それに触れていたであろうソフィアの性器を想像し――ようとしても見たこともないのでイメージすらできなかつたが――いてたつてもいられなくなつたフィロスは寝袋から這い出した。

ソフィアを起こさぬように静かに抜け出し、野営から少し離れた茂みの中へと移動した。

満天の星空。

近くには誰もいない。

月明かりのない暗い闇の中で、フィロスはペニスを出して自慰を始めた。

それを覚えたのは最近のことだ。書庫で偶然見つけた旧時代の成年向けの書籍。そこにペニスの愛撫のし方が載っていて、それを真似たのがきっかけだった。

書庫に通うのは宇宙や天体の書物を読むことが主だったが、隠れてそういうものも読んでいた。当然、両親には秘密だ。怒られるに決まっている。

そういう罪悪感も伴って、自慰には妙な背徳感を感じていた。

そして今、自分を保護してくれている旅の道連れ、ソフィアを想って自慰を行なっている。握るとすぐに射精でしまいそうだったので、フィロスはじっくり時間をかけることにした。この時間をすぐに終わらせてしまつてはもつたいないと、そう感じたのである。

目を閉じ思い出すのはソフィアの笑顔、瞳、そして甘く囁いたあの声。

「ソフィ、ソフィ……」

静かに何度も名を呼び、自分のペニスに触れる。すぐ射精してしまわないように触れていたのが仇となったのか。押し寄せる防ぎようのない射精感に乗り遅れまいとフィロスはペニスを握り直して激しく扱き始めた。

「ソフィ、……出るっ」

妄想の中の彼女に向けての独白。

いままで、ソフィアを想って自慰をしたことは何度もあった。しかし。

「うわ、こんなに……」

大量の射精。止まらぬ勃起。こんなことは初めてだった。

それから二度ほど自慰を続けて、フィロスはやつと落ち着きを取り戻して寝袋に戻るのだった。

♫ ♫ ♫

「おはよ、フィロ」

「お、おはよう。ソフィ」

翌朝。いつものように挨拶をするが、フィロスは気恥ずかしくて顔をまともに見れなかった。罪悪感もある。

——あんなことをしていることがバレたら、ソフィはきつと怒るかな。怒るよね……嫌われたくないな。

そんなことを思う。

朝の勃起は生理現象ということで、ソフィアが意に解することは無い。トイレに行きたくなるのと何ら変わら

ないからだ。

だが、ソフィアの体を想像して自慰を行なっているとしたら話は別だ。いくらソフィアが

「朝勃ちが治らないんなら一度ヌイてきたら？」
なんて笑顔で言っているとしても。

朝食を済ませ、野営を片付けて出発した。

「今日一日歩いてもう一晩明かせば、明日には次の街に着くから。頑張っていこう」
ソフィア

の笑顔はあいもかわらず眩しく、その元氣は荷を背負って歩く肉体的な辛さなど吹き飛ばす魅力がある。

そしてそれ以上に、フィロスはソフィアが好きなんだという自分の気持ちに気がつき始めていた。だからもうソフィアに嫌われるようなこと、つまりソフィアを想つての自慰はやめようと心に誓った。

のだが。

目で追うのはソフィアの横顔、唇、胸、腰、尻、太もも。彼女の存在全てがフィロスにとって性的な存在で、

ともすれば邪な情慾に押し流されてしまいそうだった。

一日を歩き通して疲れ果て、それでも油断すると主張する下腹部の違和感を押さえつけて寝袋に入った。

フィロスは、今すぐにでもソフィアに抱きつきたかった。そして叶うことなら、自分のペニスを擦り付けたい欲望に駆られた。

ソフィアの褐色の肌は滑らかで、触れられたらきつと気持ちいいはずだった。

ソフィアの胸にもう一度触れたい。ソフィアのお尻や太ももにも触れたい。

ソフィアの下着の奥がどうなっているのか知りたい。触れてみたい。きつと柔らかな何かがあるはず――

そんな夢を見てしまったからか。

フィロスが起きた時、その下着には冷たい何かが染み込んでいて、とても不快な朝を迎えることになった。

「あー、おはようフィロ。今日は早いなだね」

「あつ！ あー、お、おはよう。ソフィ。なんとなく早く起きたんだよ」

動揺を隠そうとして振る舞うが、ソフィアには筒抜けだった

「夢精でもした？」

「ぶふっ！」

凶星を突かれて思わず吹き出すフィロス。

「え、まじで？」

「な、何でわかつたんだよ……」

「え、だって昨日寝た時と服違うし、なんかパンツと短パン干してるし」

恥ずかしいことを隠し通そうとして無駄に終わった少年は、洞穴があれば今すぐにでも入ってしまいたいほどの羞恥心で成す術なくうずくまってしまった。

「やーだなー、気にすんなってー。そういう年頃なんだから、仕方ない仕方ない」

「笑い事じゃないよ！」

「笑い事じゃないの？」

キョトンとした顔で聞き返され、深くため息をついて白状する。

「ソフィから借りたシュラフもその……少し汚しちゃっ

た……ごめん」

「なーんだ、そんなことか。いいって。洗えば済む話だし」

湯を沸かしながらソフィアは笑う。

「さ、落ち込んでないで元氣出せ、少年！ 最初の目的地はすぐそこだぞ」

やはりその笑顔は眩しく尊いものだった。



昼を少し過ぎたあたりで二人は街へと辿り着く。

使われず、整備されず、荒れ果てていた道中の路とは違い、よく整備された美しい街だった。

外壁をはじめ、対襲撃者用の防衛設備もあり、フィロスが育った街よりも幾分繁栄しているように見える。

実際、街の中の治安は良かった。驚いたのは、セリアンだけでなくメカニカもその治安と街の美観を維持するために尽力し、協力しあっているということだった。

共存している平和で栄えた都市。それがこの街だ。

「街の規模は大きい方ではないけど、治安と豊かさはこの地方では随一かな。航路を通じて他のポリスとの交易もあるみたいだし、必要なものは大体揃う。荷物を宿に置いてから買い物に出かけよう」

ソフィアの案内でフィロスはこの街を歩き回った。

旅用の衣服一式、背負いやすく荷の重さを軽減してくれる特殊なバックパック。ロープやピッケルなどの登攀トウハン道具。そして非常用の保存食と、狩りにも使える護身用のライフルと弾薬など。

ナイフや食器類は既に持つていて新たに買い足す必要はなかったし、フィロスが借りていた寝袋もすぐに成長するからとソフィアのお古を使い続けるということで買い換えることはしなかった。

本音は、ソフィアを感じられる気がする寝袋を使い続けたという邪なものだった。

夕刻になり宿に戻る。

食事も終わらせて部屋に戻った二人は、明日以降の予定を確認した後で久々の風呂に入ることにした。

「フィロ、一緒に入る？」

「えっ」

一瞬期待して緩みかけた顔を慌てて振る。

「ぼぼぼかなこと言つてないで、さっさと入つてきなよ！」

その初心な反応は、ソフィアにとつておもちやに等しく面白いものだ。弟のような存在のフィロスは、実に挪揄い甲斐のある少年だった。

「ほんとにー？ 一緒に入りたくない？」

「その風呂狭いんだから、二人で入れないだろう」

部屋に備え付けのユニット式の風呂。熱い湯は出るにしても、湯船に浸かれるほどの広さはない。一人がシャワーを浴びるだけで手一杯の広さだ。

二人で入れれば否応なく密着することになるし、性的な興奮を抑えられる保証も確証もない。現に既に勃起しているのである。

ソフィアに欲情しているのがバレたらと思うと、フィロスは恐ろしい。もし彼女に嫌われればそれは、本当に孤独ひとりになってしまうことを意味していた。

「そっか。じゃあ先入るね、フィロ」

自分の名を呼ぶその声は、どことなく甘く心地いい。

フィロスはソフィアの声が好きだった。

自分を撫でるソフィアの手が好きだった。

耳元で甘く囁くのも、揺れる大きな胸も、張りのある

尻も――

首を振り、慌てて雑念を投げ捨てようとするが自分が今座っているベッドの存在がそれを許さない。

大きいとはいえこの部屋にベッドはひとつしかなく、

それは必然的にソフィアと同じベッドで寝ることを意味している。

――床で寝る？ いや、それとも椅子で？ まあ、寝

袋はあるんだしも床で横になることはできるっちゃできるけど……？

そんなことを考えつつも、視線を上げればすぐに目につく部屋干ししているソフィアの下着一式。一つが顔ほどもある大きな胸を包み込むブラジャー。秘密の場所を優しく包み込むパンティ。

ふらふらと吸い寄せられるように、乾いているか確認するため、と自分に言い訳をしつつ近づいたところで

「フィロー、バスタオル取って」

名を呼ばれた。

――心臓が爆発するかと思った……。

「ちよ、ちよつと待つて」

慌ててバッグを探す。しかし見つからない。

「ねえソフィ、バスタオル見つからないけど、どこに入れた？」

「んー？ ホテルの備え付けのやつだよ。そのへんになんか？」

と言われて場違いなところを探していたことに気づいた。バスルームそばのカゴの中にあつたそれはすぐに見つかる。

「ここに置いておくから」

極力見ないようにしながら――といつても磨りガラスのために中の様子ははっきりと見えないうだが――告げるフィロス。

「ありがと、フィロー」

少年のそんな気遣いを知ってか知らずか。容赦無く戸を開けるとバスタオルを受け取るソフィア。当然、その

姿は一瞬であつたもののフィロの目に焼き付くことになる。

——見えちゃつた見えちゃつた見えちゃつた！

水滴の滴る褐色の肌。濡れそぼつ長い髪と大きな耳。

魅惑的な曲線美。肌の色をさらに少し濃くしたような色の乳輪と乳首。張り出した腰と引き締まつた腹部。

そしてフィロスにはあつてソフィアにはない股間の一部に生えた、豊かな陰毛。

慌てて後ろを振り返つた少年の背中に、一言投げる。

「見た？」

ソフィアの表情が見えないため、その感情がわからない。咎められているのかもしれない。怒られるかもしれない。

「み、見てないっ」

だから嘘をついた。今のは完全に不可抗力で、見ようとして見たわけではない。覗いたわけでもない。

しかし悪いことをしたと思つてしまつてフィロスは冷静さを失つていた。ソフィアは別に怒つていなかったし咎める気もなかったが、その反応が面白くて揶揄つてい

ただけなのだ。

だからくすくすと笑いながら一言だけ付け加えた。

「フィロのえっち」

それからは気が気でなかつた。

いつどれくらいシャワーをしたのかも覚えていない。気がついたらシャワーを終え、体を拭いていた。

情けないことに、こんな時にでさえ勃起は収まることはなかつた。だからシャワーを浴びながらこつそり射精

したのだが、体を拭いていたらソフィアの拾い上げたバスタオルとその時見た美しい肢体を思い出してまたペニスが隆起する。

自分は病気なのではないかとさえ思えてきた。ソフィアのことを考えるだけで体が熱く火照つてくる。

ともすれば自己主張で上を向こうとするペニスをタオルで押さえつけ、フィロスはシャワーから出た。そしてベッドの中からじつと見ているソフィアに背を向け、急いで服を着る。

「もう寝るでしょ？ フィロ」

「え、あつ、うん」

「よし」

というと、布団を捲る音がした。

「おいで、フィロ」

「や、ぼくはその、床で寝るからいいよ。シユラフあるし」

慌てて断る。一緒に寝てる時にまた夢精なんかしたら最悪だと思った。それに、床で寝られる算段はしてあるのだ。同じベッドで一緒に寝るなんてことしなくても、大丈夫なはずだった。

「んなの、許可できるわけじゃないでしょ。せつかくベッドがあるのに。体休まらないよ？」

「だ、大丈夫だって！」

「ん、聞こえなかった？ フィロ、あたしは許可できないって言ったよ」

年長者による有無を言わざぬ威嚇。抵抗できないフィロスは、渋々ベッドに潜り込んだ。

「よしよし、いい子だね、フィロ」

ソフィアの温もりを、体全体で受けているような感覚

だった。恥ずかしくて背を向けているが、シャンプーの香りが鼻を通して頭いっぱい広がっている。当然、背に触れるソフィアの体は柔らかい。

「フィロ、あつたかい？」

優しげに問いかけるその声は、耳元で囁いたあの声に似ていた。シャワーと共に放出したはずの雑念は、一度の射精では到底足りないかと嘲るように血を集める。

「んー？ なに固まつてんのフィロ。そんなんじや変なところ傷めるよ？」

と言つて寝ながら肩を揉み始めた。フィロスはまだ幼く肩こりなどとは無縁だったが、程よい力加減が緊張をほぐしていく。

「そう、リラックスリラックス。せつかく一緒に寝るんだからさ、ね？」

ソフィアはフィロスの頭の匂いを嗅ぐように顔を寄せたかと思うと、後ろから抱きしめた。背中越しに胸の柔らかさが伝わる。

「おやすみ、フィロ。良い夢を」

深夜。

フィロスは結局寝付けずにいた。それは当然、性欲のためである。

性目覚めてしまったフィロスにとって、ソフィアのスキンシップは愛情を通り越して情欲を掻き乱すものに見える。等しい。

ソフィアへの想い、それはソフィアを異性として恋焦がれるのと同時に、その体に触れたいという欲の苦しみでもあった。

情けないと思いながらも、大好きなソフィアを傷つけないため、そして彼女に嫌われて自分が傷つかないためにフィロスはこっそりと抜け出し、ベッドから離れて自己処理することにしたのだった。

——起こさないように……。

静かに寝息を立てているソフィアの寝顔は、とても愛らしく可憐だった。その唇に口づけすることができたらどれほどいいだろう。

思わずその唇に触れようとして思いとどまる。

——トイレ、そう、ぼくはトイレに行くために起きたんだ。余計なことほししない。

自分に言い聞かせ、備え付けのトイレへと向かう。

トイレで用を足し、一度流してから愛撫を始める。手で握ると人差し指が陰茎小帯、俗に裏筋と呼ばれる部位を刺激する。

フィロスにとってここが最大の性感帯だった。

「ソフィ、ああ、そふい……」

快感に流されるように、だらしなくソフィアの名を呼ぶ。
ぶ。

「ソフィ、ソフィ……」

——好き、ソフィ、好き好き……。

繰り返し繰り返し名を呼び続けた。泣きそうなほどその名が愛おしい。

右手の動きに合わせて、名を呼ぶ声も早くなる。

——あうっ……。

「なに、フィロ？」

射精と同時に、突然背後から呼ばれ、フィロスは文字

通り跳ね上がった。

「そ、ソフィ、起きてたの!？」

「ん、名前呼ばれた気がして起きた。そしたらフィロに名前呼ばれてた」

寝ぼけた表情と声。これなら誤魔化せるかもしれない
と思っ

「お、おしっこ！ おしっこしてたんだけ、ぼく」

あまりの動揺に声が裏返る。

「あたしの名前呼びながら？」

「そ、それはあの……」

言い訳が続かない。寝起きだからか、軽蔑しているかなのか。低い声のソフィアの感情は、いまいち読めない。

しかし、咄嗟に軽蔑されていると感じた。ソフィアの目は便器に飛び散った精液を見つけ、低い声で短く

「んー」

と言ったからだ。フィロスには唸っているように聞こえた。

「フィロ、なにしてたか言っごらん」

と言われ、小さく体を震わせるフィロス。

——絶対嫌われる……。

その思いから身動きが取れなくなっていた。

「んー。正直に言ってくれたらあたしは怒らないよ。こんな夜中に、あたしの名前を呼びながら、トイレでなにしてたの?」

フィロスは涙が出てきた。自分の愚かな行為が、自分の身の破滅を産んだ。なにより、ソフィアを怒らせたことが情けなかった。だから

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と赦しを乞うことしかできない。

「フィロ。フィロ！ あたしの目を見て。ほら。あたし怒ってるように見える?」

顔を挟まれ、俯いた顔を上げられる。顔が近い。

ソフィアのコバルトブルーの瞳は多少眠たそうではあるが、彼女の言う通り怒っているようには見えない。若干の悪戯っぽい光が感じられる。

「ぼく、ソフィに悪いことをした……ソフィのこと考えながら、オナニーした……ごめんなさい、ソフィ」

その表情に、ソフィアは妙な高揚感を覚える。ゾクゾクと這い上がってくる悪い気持ち。

「そう、あたしの名前呼んで、あたしでえつちな妄想して、オナニーしてたんだ？ いけない子だよ」

ソフィアは笑みを我慢できないことを自覚した。もう今日はフィロスをいじめることに決める。

耳元で甘く囁く。

「ねえ、フィロ。あたしの裸見て興奮しちゃった？」

甘い吐息。フィロスより頭ひとつ背の高いソフィアの胸は、向かい合う形のために少年の目の前にあつた。

Tシャツの奥にブラジャーはつけていない。何物にも縛られていない豊かな乳房が揺れる。

「どんなふうにおちんちんを触つてたの？」

ソフィアの口からありえない言葉が溢れる。ソフィアの声で、卑猥な言葉がフィロスの鼓膜を叩いた。

なにが起きているのか。フィロスは混乱している。怒られる、軽蔑されると思っていたのに、予想してた展開とは全く異なることが起きていた。

「どうなふうによつたか見せて、フィロ」

「え、でも……」

流石にそれは恥ずかしい。そう思ったがソフィアは譲るつもりはなかった。

「ちゃんとできたら、あたしでひとりえつちしたこと許してあげる」

「え……」

赦しを得られる。罪悪感を払拭するには破壊的に魅惑的な響きだった。

フィロスの呼吸が早くなる。安堵と辱めでおかしくなりそうなほど勃起している。

「最後まで見てあげるから、あたしの名前を呼びながらフィロがおちんちん、しこしこしてるところ見せて？ ほら、フィロのおちんちんも早く触つて、言つてるよ？」

ソフィアの服の裾が、そそり立つフィロスの亀頭に触れた。ふんわりとした感触が、恐ろしいほどの快感をもたらす。

「そうだ。見せてくれたら今度からあたしでひとりえつちしていいよ」

追い討ちをかけられ、ついにフィロスは降伏する。

「フィロはそうやって持つんだね」

しゃがんで興味深そうに股間を注視するソフィア。目の前で見られていると思うと興奮と緊張で勃起はするものの射精に至りそうな気配はない。

——もうなにがなんだかわからない。

半ばやけくそになっていたフィロスをみて、ソフィアは何かを思いついた。

「そっかそっか。よし」

言つて、Tシャツの裾をめくり上げた。胸の下で止

め、上目遣いにフィロスの顔を覗き込む。

「フィロ、いつもあたしのおっぱい見てたでしょ」

「そんなことは……」

ないと見えなかった。

「おっぱい見たい？ さつきちらつとしか見れなかったもんね？」

ソフィアはTシャツ一枚。それを捲り上げているので下はパンティ一枚だけだった。

その裾も上げきつてしまえば、夢にまで見たソフィア

の胸が直接見られる。

「……見たい」

「よしよし、素直な子は好きだよ」

好きだよ、の言葉は悪魔にも似た甘美な響きだった。

Tシャツを脱ぎ、胸をあらわにする。大きな乳房を抱えるように寄せて上げると、深い谷間がより深くなる。

「どう？」

自慢げにするソフィアがすごく可愛く、そしてすごいやらしい。

「すごい、えつちだ……」

薄灯に照らされたソフィアの肌は艶かしく輝く。

「ねえ、あたしの名前呼びながらして？ フィロ」

目の前に当人がいるのに。その相手の名を呼びながらの自慰を求める。

ソフィアは我ながら鬼畜だと思った。だが自分の胸を見て興奮し、必死に手を動かす可愛い弟のようにフィロスの蕩けた顔を見てもう止まらなかつた。

「……ソフィ」

「気持ちいい？ フィロ」



ERINCH

「ソフィ、気持ちいい……」

「もつとあたしの名前呼んで、フィロ」

「ソフィ……、ソフィ、ソフィ……!」

いつしか、二人は見つめあっていた。フィロスは胸からソフィアの瞳に吸い込まれるように視線を離せなかった。

その顔に触れたい。その唇に触れたい。

その耳に甘噛みしたい。思い切り甘えたい。

そんな欲望が迸るように、フィロスは勢いよく射精した。

「きやつ」

精液はソフィアの胸を越え、顔や髪にまで飛んだ。褐色の肌と髪に浮き上がるような白い精液は、悪戯つぽく微笑むソフィアの表情をより卑猥に彩る。

「元氣いい、と言うか。いっぱい出たねえ。服脱いでてよかつた」

顔にかかった精液を指で掬い、それを舐めとる。

「あたし、もっかいシャワー浴びるから。えつちなフィロくんは先に寝てて」

いやらしい子だと思われたのが恥ずかしくて、フィロスは顔を隠すように俯いてベッドへと潜り込んだ。

——まさかこんなことになるとは。

シャワーを浴びながら、ソフィアは思う。フィロスが自分に好意を持っていることは薄々気づいてはいた。だが歳の差もあるし、そんなのは少年期の淡い憧れみたいなものだ。そうであるはずだったし、そうでなければならなかった。

しかし、冗談めかして言ってきたフィロスに対する揶揄いがこの事態に繋がったとしたら、自分に責任がないわけではなかった。

そしてこの火照りも、自業自得と言えるのだ。

——だからと言って、えつちするわけにもいかんじゃね。はあ、フィロのせーえきの匂い、えろ……。

そう思い、ソフィアはシャワーを浴びながらフィロスに対する妙な高揚感と満足感ともに、密かに自慰をするのだった。

「あ、イク……」